

立国はわたくしなり

三菱ケミカルグループ(株)
執行役シニアバイスプレジデント

羽 深 成 樹



ウクライナ人と「やせ我慢」

ロシアのウクライナ侵攻は世界を驚かせた。ゼレンスキー大統領には、ロシアとの軍事衝突を避けてNATO加盟申請を見送るという選択肢もあったが、西側諸国の支援を得てロシアと戦う決断をし、国民もそれを支持した。

ウクライナの選択を見て思い浮かんだのが、福沢諭吉の「瘦我慢の説」である。「立国はわたくしなり、おおやけにあらざるなり」で始まるこの小論で、福沢は、国を成り立たせているのは、官や政府（おおやけ）ではなく、そこに住み暮らす人々の私情（わたくし）だと主張する。国の起源をたどれば、誰かが命じてできたものではなく、人民が自らの意思で造ったものだ。であれば、自国の危機に際し、敵に対して勝算がない場合でも、千辛万苦、力の限りを尽くして戦うのが立国の基本である。その精神を福沢は「瘦せ我慢」の土風と呼んだ。

やせ我慢とは、しなくてもよいのに自ら進んでする我慢である。進んでするのだから私情に発するわけだが、我慢である以上、単なる私利私欲の発露ではない。やりたいことをやるのが人間の普通の感情なのに、それを自発的に抑えている何ものかの存在—そこに「公的なもの」が宿ることになる。

ウクライナ国民は、誰から命じられたわけでもなく、自らの判断とし